作り続けたくて仕方がないのか。
もしくは。
理想とするものを形にしたくて仕方がないのか。
または。
その両方なのか。
よくわからなくなってしまった。おそらくは三択目のような気がするが、だとすれば二択目にたどり着く日はこないのではないかと思う。そう考えると、息苦しくなる。
動かす指を止めることなく、そんなことを考える。指の動きはずいぶんと鈍くなっている。一日中書いているのだからそれは当然だった。朝から書き続けて、今日だけで五千文字近く進んでいる。俺にしてはなかなかの集中具合ではないかと思う。五杯のコーヒーのおかげだ。缶ではなく、インスタントだ。缶コーヒーの濃さでは満足できないので、俺はインスタント派だ。
外で話し声が聞こえる。親子の会話だ。こどものほうがよく話している。父親はうんうんと言葉を返すだけ。にもかかわらず、こどもは楽しそうに話し続けている。
母親よりも父親がすきなのだろうか。俺もそうだったので、なんとなく親近感が湧く。
湧いた親近感が手を止めさせ、カーテンをめくらせた。
小学校低学年の男児と父親がアパートの駐車場で話しているのが見えた。父親はタバコを吸っている。こどもの方はどうやらそれに付いてきたらしい。ほほえましい。
すぐに作業に戻る。
自分にも間違いなくあんな頃があったのだと思うと、こう考えずにはいられなくなった。
俺はいつから土日を執筆に注ぐような人間になったのだろうか。
そう考えるだけで、思い出そうとはしなかった。思い出せないことは経験として知っているからだ。思い出せるのはキッカケだけだ。キッカケは、好きな小説家たちの本をすべて読みつくしてしまったことだ。そしてそれを機に、まだ読んでいない好きな文章が無いのであれば自分でつくってしまえばいい、と考えてしまった事が、今のような生活をする発端だ。
後悔の有無を訊かれれば、ない、と断言する。
楽しいだけではないのは確かなことだが、楽しさだけを求めて書いているわけではない。単的に言えば、人生を充実させるために書き続けている。俺にとっては苦しいことも人生を充実させるために重要な要素だ。楽しいことだけをしていては楽しさを真に味わっているとは言えない。苦しさを知ってこそ、楽しいということがどういうものなのか理解することができる。
たまに、週末らしい週末を過ごすことがある。その日は決まって夜遅くまで飲酒する。
俺は酒が好きなので、楽しくて仕方がない。だけど、飲んでいるときや三時頃に布団に入る時に、飲んでなければどれほど書き進められただろうか、と考えてしまう。罪悪感のようなものに苛まれてしまう。
そんな時に俺は執筆の楽しさを思い出すことが多い。酒をやめる気にはならないが。